

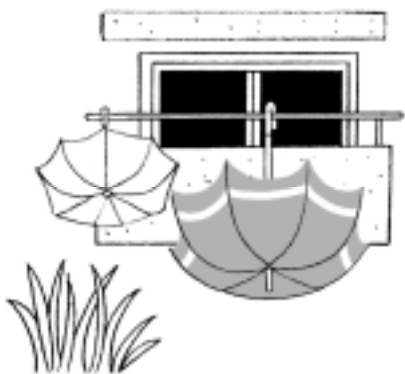
一九四六年、アメリカの文化人類学者、ルース・ベネディクト女史は、著書『菊と刀』の中で独自の日本人論を展開し、日本文化を「恥の文化」と評しました。「日本人は成文化された法律を守り、世間にもさることながら、それ以上に、世間に顔向けできないような恥ずかしいことはしない、という精神的支柱を堅持している」というのです。

しかし、昨今の大企業による不正や一部官公庁の不祥事など、利益のためであればなりふり構わない企業体質や、国民の信頼を裏切る怠惰な所業からは、「恥の文化」からは程遠い姿勢が垣間見られます。個人レベルでも、恥を知らぬ行為が後を絶ちません。給食費を払わない親や、学校に子どもを連れてくる親。電車内で大っぴらに化粧に興じる女性、酒に酔って駅のホームでつかみ合いの喧嘩をしているサラリーマン。他人の迷惑を顧みない行為は、日ごと繰り返されています。

戦後六十年以上が経過して、日本人が持つていたといわれる「恥じ入る」という高い精神性は、地に落ちたといった様相です。昨年二〇万部を超えるベストセラーとなった『国家の品格』の著者でもある数学者の藤原正彦氏は、「情緒」「武士道」といった言葉をキーワードに、取り戻すべき善き日本の姿を訴えています。

氏は、新田次郎・藤原ていという二人の作家を両親に持つ家庭に生まれ、藤原家に代々受け継がれてきた武士道精神を小さな頃から叩き込まれたといいます。曾祖父は信州の下級武士の出で、その孫

後世に伝えたい 日本の「誇り」



え・牧えみこ

である父・新田次郎が火事場から小さな木片を拾っていたときのこと。「火事場からはどんなものも持って来てはならない。あつた場所に戻して来い」と烈火のごとく怒り、「火事場泥棒は、嘆き悲しんでいる人から物を盗るといふ、泥棒の中でも最も恥ずべき泥棒だ。惻隠の情がない。卑怯でもある」と教え諭したといいます。

正彦氏も息子たちに、武士道精神と卑怯を憎む心を植え付けました。「弱い者がいじめられていたら、ぶん殴つても助ける。見て見ぬふりをするのは卑怯だ」という父の言葉を伝え、そして信州の生家にある三畳間に連れて行き、「卑怯な行ないをしたときは、ここで腹を切るんだ」と教えたそうです。

反面、褒める時は徹底的に褒めて褒めまくりました。「人間の本質的な部分で褒められた経験は、挫折した時に自然と思い出され、自信回復への特效薬となる」という持論を、自らの子育てで実践してきたのです。「誇りとは、それを振りかざすことで、鼻持ちならない人間になるためのものではなく、窮地に陥った時に挫けないための心の杖である」という格言があります。「誇り」が失われつつある現在の日本。私たち一人ひとりが、人としての誇りを自身の行動の中で次世代へ伝えていく。そのことこそが最大の急務です。

倫理法人会がそのために果たす役割は、決して少なくありません。職場や地域に倫理を広めることが、日本再生への一番の近道と心得、新たな道を作っていきましょう。